

대한민국 위기의 근원

반일 종족주의

反日
種族主義

이영훈 외



더 이상 외면할 수 없는 기억과의 투쟁,
그 진실된 역사 이야기가 시작됐다!

미래

種族

李栄薫 [編著]

日韓危機の根源

反日

確かに、日本支配は朝鮮に差別・抑圧・不平等をもたらした。
だが、だからといって、

主義

歴史に嘘をつく
ことは
できない!

文藝春秋刊 定価(本体 1600円+税)

韓国を震撼させたベストセラーの日本語版



12

独島、反日種族主義の最高象徴

李栄薫

真の知識人は世界人

独島（日本で言う竹島）は今日、韓国人を支配する反日種族主義の一番熾烈な象徴です。南韓と北韓を通して民族主義の最高の象徴を挙げるとするならば、何と言っても白頭山です。白頭山は朝鮮王朝時代から、それなりの大きな象徴としてあり続けて来ました。しかし、そこには反日種族主義が直接現われてはおらず、底辺に潜伏しています。独島はそうではありません。順を追って説明して行きますが、朝鮮王朝時代には独島を認識もしていませんでした。独島は大韓民国成立以後、それもここ二〇年間に、急に反日種族主義の象徴として浮かび上がって来ました。独島は韓国と日本が争う、韓国の立場からすると譲歩できない象徴です。それだけに、それに異議を唱えると、大衆から強い攻撃を受ける大きな危険性があると言えます。

しかし、私は大衆の人気に神経を使わなければならない政治家ではありません。一人の知識人です。知識人が大衆の顔色を窺ったり、言うべきことを言わず、文章の論調を変えてしまったりしたら、その人は知識人だとは言えません。真の知識人は世界人です。世界人として自由人です。世界人の観点で自分の属する国家の利害関係をも公平に見つめなければなりません。そのような姿勢は政治家にも同じく要求されます。そうあってこそ国際社会が平和で、それぞれの国も平安になります。私は一人の知識人として、我々の憲法が保障する良心の自由、思想の自由、学問の自由を信じ、私の所信に従い発言するのみです。

『三国史記』の于山国と鬱陵島

今日、韓国政府や国民が独島を歴史的に韓国の固有の領土だと主張している根拠の一つは、独島が于山という名前で新羅以来、歴代王朝の支配を受けて来たという事実です。『三国史記』^{注40}「新羅本紀智証王一三年（五一二年）の条」に、次のような記事が出て来ます。

于山国が新羅に帰服した。毎年新羅に土産品を貢納した。于山国は溟州の東側の海にある島だ。あるいは鬱陵島とも言う。土地の大きさは方一百里である。険峻なのを信じ新羅に服さなかった。伊滄異斯夫將軍が征服した。

人々は、この記事に出て来る于山は今日の独島だ、と主張していますが、率直に言って、甚だ

注40：高麗仁宗の命により金富軾らが1145年に編纂した、新羅・高句麗・百済に関する歴史書。紀伝体（本紀・年表・志・列伝など中国の正史の構成）で書かれている。朝鮮古代史研究の基本史料のひとつ。

しい飛躍です。ここに出て来る于山は、鬱（鬱とも表記）陵島に成立した「国」の名前に過ぎません。その鬱陵島に今日の独島が含まれていたのかどうかは、この記事だけでは分かりかねます。そうかもしれないし、そうでないかもしれないかもしれません。にもかかわらず我々韓国人は、于山を無条件に独島だと断定しています。一種の「弊習」とも言えると、ある日本人学者が指摘しましたが、確かに間違った指摘でもありません。

『世宗実録地理志』の于山と武陵

独島固有領土説の最もよく知られた根拠は、一四五四年に成った『世宗実録地理志』^{注41}「江原道三陟都護府蔚珍県の条」に出て来る次の記事です。

于山と武陵の二つの島は県の東側、海の中にある。二つの島はお互いあまり離れてはいない。天氣がよければお互い眺められる。新羅時代は于山国と称したが、鬱陵島とも言った。

ここでも言及されているように、新羅時代は于山国イコール鬱陵島の関係でした。そうだったものが、ここで于山と武陵という二つの島に分離されました。武陵は鬱陵の別称です。この変化をどのように理解すべきなのでしょう。一つの解釈は次のようです。鬱陵島は元来二つの島で成り立っていた。二つを合わせて鬱陵島あるいは于山国と呼んだ。いつの間にか別々に呼ばれ始

め、一つは鬱陵島、もう一つは于山島となった。もう一つの解釈は次の通りです。于山とはもともと国の名前だったが、いつからかそれを島と考える誤解が生まれた。つまり、于山島は実在しない幻想の島である。

私は二番目の解釈が妥当だと考えます。初めの解釈により于山島が今日の独島だとすると、次のような矛盾が生じます。『三国史記』と『世宗実録地理志』が指摘するように、新羅時代には于山国という国がありました。『高麗史』^{注42}によると、于山国は一一世紀初めまで存続しましたが、消えてしまいました。以後どこかの島にその国の名前を付けたとしましょう。その島は于山国の中心部か、于山国の人々が暮らした島です。ところで、皆知つての通り、独島は人が住める環境ではありません。土地もなく、水もないからです。国際法ではそのような所を島とは呼びません。海にそびえる大きな岩に過ぎません。一方、鬱陵島には人が暮らしていました。于山国の中心は鬱陵島でした。六世紀の于山国が、鬱陵島から東南に八七キロ離れた岩の島をその領域に組み込んでいたのかどうかは分かりませんが、とにかくその島が国の名前を継承するはずがありません。于山国の中心部でなかっただけでなく、人が住める所でもなかったからです。それで矛盾だと言うのです。

一五世紀初めまで一つの島

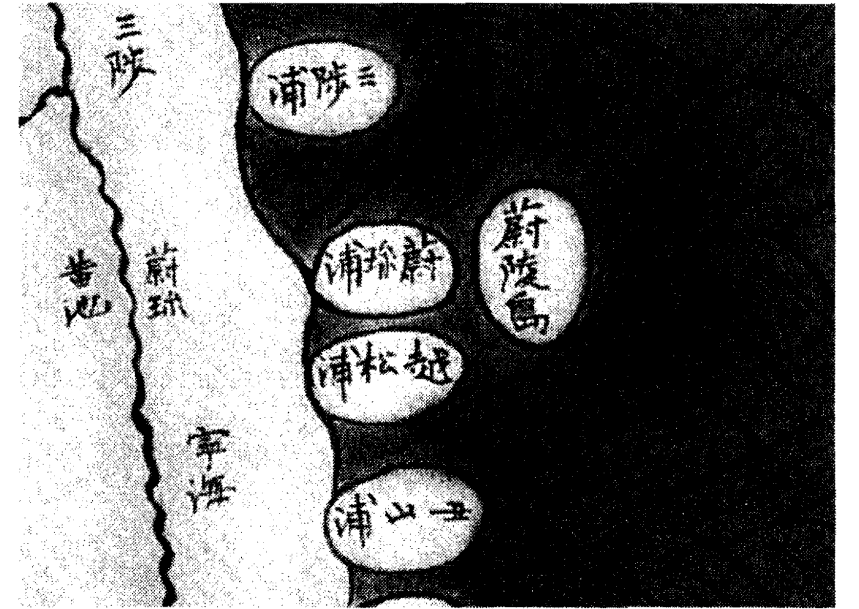
いろいろな史料を検討してみると、朝鮮王朝の一五世紀初めまでは、蔚珍県の東側に于山と

注42：朝鮮王朝世宗の命により金宗瑞・鄭麟趾らが1451年に編纂した、高麗に関する歴史書。紀伝体で書かれている。高麗史研究の基本史料のひとつ。

注41：『世宗実録』の148巻から155巻を占める全国地理書。首都の京都漢城府をはじめ全国8道(京畿・忠清・慶尚・全羅・黄海・江原・平安・咸吉)内の府・州・郡・県の沿革・境域・戸口・姓氏・人物・産物・古跡などを記している。



地図12-2 「八道総図」中の鬱陵島と于山島(1530年)



地図12-1 「混一疆理歴代国都之図」中の鬱陵島(1402年)

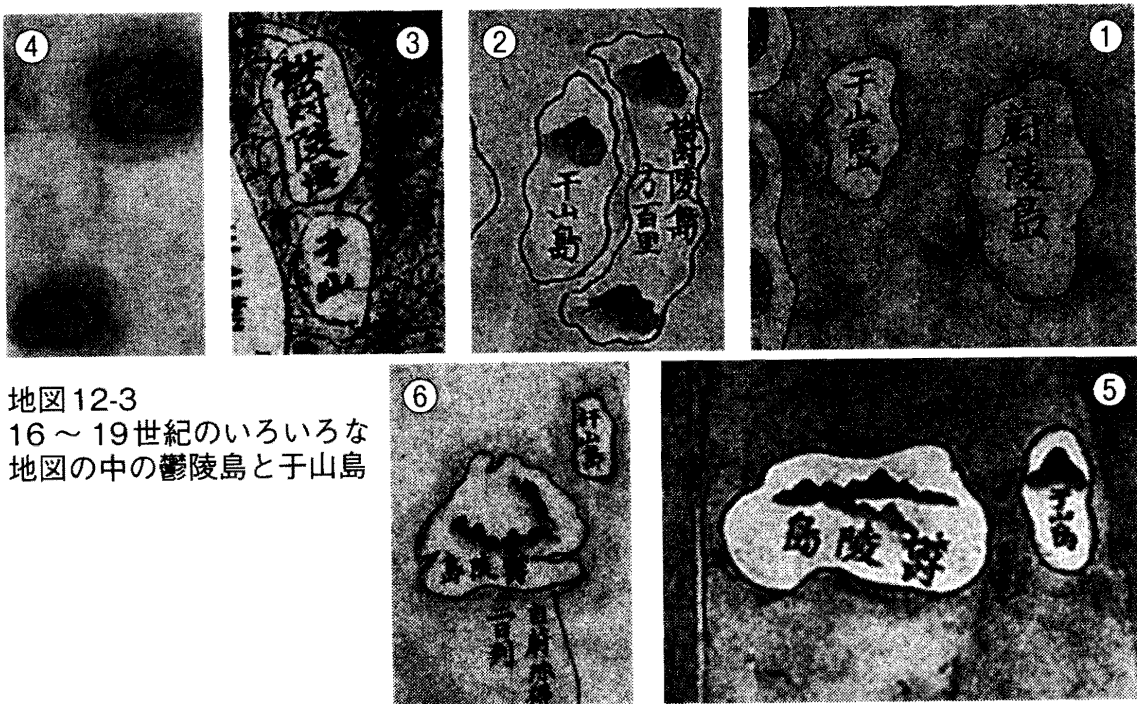
とも呼ばれるようになったのです。金麟雨の報告に接した太宗は、于山島の住民をみな陸地に移動させ始めます。朝鮮王朝は全国の島から人を無くす、いわゆる空島政策を実施していました。これはその一環です。当時の『太宗実録』では、「武陵于山等処」といったふうに、二つの地名を併記しました。本名と別名を単に羅列しただけのことのように見えます。ところが、そういう表記の仕方が繰り返された結果、別の名前の二つの島があったかのような誤解が生じ始めました。

当初何気なく生じた誤解は、歳月が流れるに従い、それらしき幻想で膨れ上がります。先に紹介した『世宗実録地理志』の記事がそれです。島から人を追い出してから、すでに三七年の歳月が流れていました。「二つの島はお互いあまり離れてはいない。天氣が良ければお互いに眺めることができる」が、まさに幻想の記述です。二つの島が離れていなければ、お互い眺め合えるのは当然であり、そもそも「天氣が良ければ」などという但し書きを付けたこと自体が、想像の産物であることを物語っています。その後、一九世紀までに描かれた多くの地図を見ると、その点を容易に確認できます。

八道総図

一五三〇年に編纂された『新增東国輿地勝覧』に「八道総図」という地図があります。この地図は、幻想で生まれた于山島を描いた最初の地図です。地図12-2は、その「八道総図」から江原道の前の海の部分だけをとったものです。于山島は鬱陵島の半分ほどの大きさで、鬱陵島の西側の遠くないところに位置しています。韓国の外務省はこの地図を提示しながら、

武陵の二つの島がある、という認識はありませんでした。一四〇二年、権近クオンジンなどの朝鮮王朝のエリート官僚が「混一疆理歴代国都之図」という地図を描きました。地図12-1は、その地図に描かれた蔚珍県東側の海です。見ての通り、蔚珍浦の外側の海に島は鬱陵島一つだけです(蔚々鬱)。その点で、後で紹介する朝鮮王朝時代の地図と大きな差があります。このように、もともと島は一つであり、その名前は鬱陵島でした。ところで、その島は「于山島」とも呼ばれました。一四一七年の『太宗実録』には、于山島を探查に来た金麟雨キムイヌという官吏が、「人口は一五戸、八六人だ」と報告している記事があります。その于山島は鬱陵島でした。いつの間にか于山国が消え、鬱陵島が于山島



地図12-3
16～19世紀のいろいろな
地図の中の鬱陵島と于山島

于山は独島だ、と主張して来ました。中・高校の韓国史の教科書も、そのように教えています。しかし私は、それに同意できません。独島は鬱陵島の東南八七キロの海の中に位置しているからです。この地図を根拠に独島固有領土説を主張するのは、学生たちに東西南北を混同するよう教える暴挙と同じです。たとえ独島を抛棄することになったとしても、そのような乱暴な教育はすべきではないと思います。国際的にも恥です。インターネットを検索すると、少なからぬ日本人たちが韓国外務省のホームページに載せられている地図を見て「韓国政府は東西南北も区別できないのか」と嘲笑っています。

漂う島

以後一九世紀まで、多くの地図が描かれてきましたが、地図によつて于山島の位置が相違しています。いくつかの例を挙げると、地図12-3のようになります。最

初の地図では于山島の位置は鬱陵島の西側ですが、かなりの距離です。二番目の地図では于山島は鬱陵島に抱き込まれている形です。三番目の地図では于山島は鬱陵島の南側です。四番目の地図では于山島は鬱陵島の西南側ですが、距離が離れています。五番目の地図では于山島は鬱陵島の東に位置し、六番目の地図では鬱陵島の東北です。鬱陵島と比べ大きさもさまざまです。

池内敏という日本人研究者が、合わせて一一六枚の地図に描かれた于山島の位置を追跡したことがあります。それによると、一七世紀まで于山島はたいてい鬱陵島の西側にありました。一八世紀に入ると南側に移動する傾向を見せます。以後一九世紀には東に行き、北東方向に移って行く傾向にあります。このように于山島は、朝鮮王朝時代にわたつてさ迷い漂う島でした。幻想の島だからです。当然それは、鬱陵島から東南八七キロに位置する独島ではありませんでした。独島と比定してもいいと言える近似な方向と位置に于山島を描いた地図は、たったの一枚もありません。つまり、朝鮮王朝は独島の存在を認知していませんでした。全ての島から人を強制的に移動させたので、人の住めない遠い海の岩の島に関心を置く理由がなかったのです。

安龍福事件

一八世紀以降のさまざまな地図で、于山島の位置が、鬱陵島の西に、そして東に、さらには北東に漂うことと関連して、一七世紀末の安龍福事件アンヨンボクを考慮する必要があります。先に指摘したように朝鮮王朝は、一四一七年以来、鬱陵島を空島にしました。一七世紀に入ると、当時の鬱陵島

を「竹島」と呼んだ日本の漁民が、毎年定期的に来ては魚を獲り、木も伐採するようになります。さらに彼らは、鬱陵島を日本の領土と考え始めるようになります。一六九三年、東萊府の安龍福の一行が鬱陵島に魚を獲りに出かけ、日本の漁民と衝突しました。史料によって差がありますが、安龍福は、日本の漁民に捕らえられてなのか、そうでなければ彼らの後に付いて日本に行き、鬱陵島が朝鮮の領土であることを主張します。その後、対馬を経て東萊府に戻って来ます。この事件を契機に、朝鮮政府と日本の幕府の間で外交交渉が始まります。日本は鬱陵島が朝鮮の領土であることを認め、日本の漁民が鬱陵島に行くことを禁止します。ところが、そのような事実を知らない安龍福は一六九六年、再び鬱陵島を経て日本に行きます。そうして鬱陵島だけでなく、当時日本人が「松島」と呼んでいた（今日では「竹島」と呼ぶ）島、他でもない今日の独島も朝鮮の領土だと主張します。安龍福はその根拠として、彼が所持する江原道の地図を提示します。前に紹介した、于山島と鬱陵島を描いた地図の一つだったと思われる。当時は独島という名前はありませんでした。安龍福は日本人が「松島」と呼ぶ島を見て、彼が地図を通して見慣れて来た于山島だと考えたのです。しかし日本は安龍福を相手にせず、朝鮮に追放しました。江原道襄陽に戻って来た安龍福は、漢城（現ソウル）に押送され監獄に入れられます。司憲部は、みだりに越境した罪は大きい、死刑に処すべきだ、と主張しました。しかし、領議政（日本で言う太政大臣）が乗り出して来て、日本が鬱陵島への航海禁止処置を下すのに功労があったのだからと弁護したので、安龍福は流刑に処されました。

要するに安龍福は、自ら于山島を見たと思える韓国史最初で唯一の人でした。日本の漁民がその島を「松島」と呼び自分たちの領土だと考えているのを見て、「違うぞ。それはうちの于山島だ」と主張したのです。それが今日の独島でした。しかし朝鮮の朝廷は、安龍福のそのような主張に微塵の関心も示しませんでした。「そうか、于山島を発見したって？ それはどこにあるのだ？」といったふうに関心を示したり、官吏を派遣して島を探查したりはしませんでした。朝鮮王朝は鬱陵島にだけ関心があり、于山島には何の関心も示しませんでした。

一六九九年以降、朝鮮王朝は三年ごとに官吏を鬱陵島に派遣し、日本の漁民が来てはいないか監視しました。以後いくつかの地図から、蔚珍県と鬱陵島の間に描かれた于山島が消えました。その間には何の島もない、ということが自然に分かって来たからです。それでも于山島という島に対する幻想はなくなりませんでした。一八世紀以降于山島が、再び鬱陵島の南そして東に漂うのはそうした理由からです。

于山島の終着地

一八八一年、日本人が鬱陵島に不法侵入しました。これを契機に一八八二年、高宗は李奎遠イギェウワンを監察史として派遣し、鬱陵島を詳しく探查させました。一八八三年からは鬱陵島に人を住まわせました。なんと四六六年ぶりのことです。派遣する李奎遠に高宗は「鬱陵島の近所に松島、竹島（日本という竹島とは違うもの）、于山島があるそうだが、距離がどれほどなのか調査しなさい」と命じます。そしてさらに加えて、「松島、竹島、于山島を合わせて鬱陵島と呼ぶ者もいる。これ

それを検討する前に、まずはこの勅令四一号によって于山島が行方をくらましたという事実注目する必要があります。以後、于山島はどの資料にも現われません。一五世紀初めに鬱陵島から人々を引き上げさせて生まれた于山島は、あちらこちらを漂ったあげく、消滅したのです。その一年前の「大韓全図」まで描かれ続けて来た島でした。その由緒深い島を大韓帝国がそれ以上言及しなくなったのは、それが幻想の島だったことにやっと気づいたからです。それ以外には解りできません。私は、大韓帝国の勅令四一号は「于山島は幻想の島だ」と公布したのと同じだと考えています。

幻想の判明

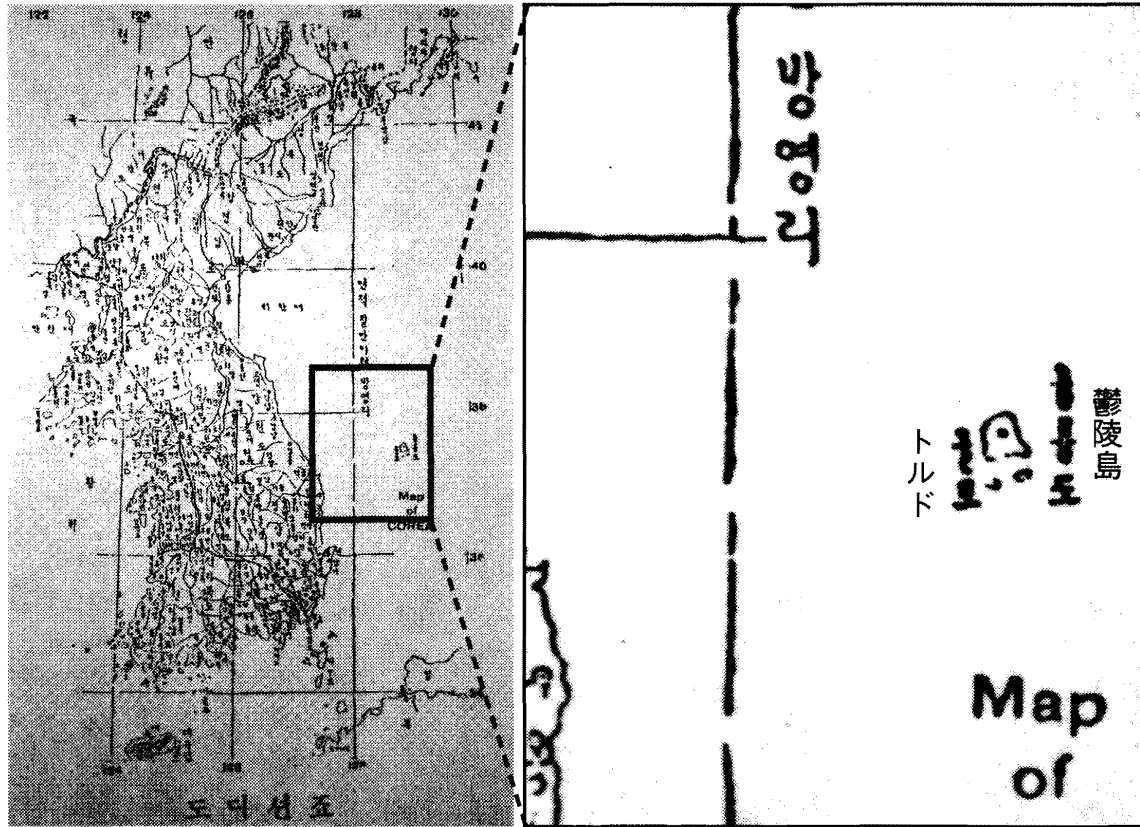
一八八三年に居住することが許されて以降、鬱陵島の人口は一九〇〇年までに一〇〇〇人に増加しました。日本人も多く暮らしましたが、それは主にアシカ狩りのためでした。一九〇〇年、大韓帝国は勅令四一号を出して鬱陵島を郡に昇格し、郡守を派遣しました。そのとき、郡の領域を定めるに際し、「鬱陵全島と竹島と石島を管轄する」としました。竹島は今日の竹島（現在日本が言うところの竹島ではなく、鬱陵島のそばの竹島）です。問題は石島です。これをもって今日の韓国政府や学者たちは独島だと主張しています。韓国が独島固有領土説を主張するとき、一つの強力な根拠として提示されるのが、この石島＝独島説だと言えます。果たしてそうでしょうか？



地図12-4 「大韓全図」中の鬱陵島と于山島 (1899年)

についても詳細に調べなさい」とも命じます。このことから、一八八二年の時点でも、朝鮮王朝の鬱陵島に対する理解は混乱していたことが分かります。後に鬱陵島から帰って来た李奎遠は、「于山島は見つけることができなかつた」と報告しました。当時彼が詳しく描いた鬱陵島の地図には、竹島という付属の島はあつても、于山島はありません。つまり李奎遠は、東南八七キロの海の中に浮かぶ岩の島が分からなかつたか、分かつたとしても、それを鬱陵島の付属とは考えなかつたのです。

それでも、于山島に対する幻想はなくなりませんでした。一八九九年、大韓帝国の学部が「大韓全図」という地図を製作しました。地図12-4はその地図の鬱陵島の部分です。于山島は鬱陵島の東北に付く小さな島として描かれています。一七年前、李奎遠が「竹島だ」と言った、まさにその島です。今日も「竹島」と呼ばれる島です。先に紹介したように、一八世紀以来、いくつかの地図で于山島の位置が鬱陵島の東北に動いていました。そこに何らかの小さな島が実在している、という情報が影響を与えたようです。とにかく一八九九年、学部は「大韓全図」を製作しながら、その島を于山島と考えました。一七年前、李奎遠が于山島は見つけられなかつたと述べた報告は、大きな影響を与えなかつたようです。長い間続いて来ている于山島に対する幻想は、簡単に無くなるものではなかつたということです。



地図12-5 「朝鮮地図」とその鬱陵島の部分(1911年)

は「トルソム」になる。ところで、慶尚道や全羅道の方言で「トル」は「ドク」とも言う。したがって、石島を慶尚道や全羅道の方言で読むと「ドクソム」だ。その「ドクソム」を「独(ドク)」という漢字と「島(ドクト)」だ。――

この主張もやはり、かなりの自家撞着です。あまりに貧弱な論理のつなぎ合わせに気が滅入って来ます。客観的に見て独島は、石の島というより岩の島です。石と岩は違います。したがって石島は、初めから独島とは無関係の島です。また、特定の音を表記するため文字を借りる借字現象は、ある意味を正確に代弁する文字がないときに現われる現象です。我々には長い漢字文明圏としての歴史があります。「いしじま」という意味を漢字で「石島」と表現するのは、

大韓帝国は新しい行政区域を宣布するに際し、鬱陵島と付属の島嶼を調査したものだと思われま。その結果、竹島と石島を郡域に指定しました。竹島は今の竹島そのものです。竹島以外で今日鬱陵島に付属する島は観音島で、それ以外には人が暮らす島はありません。ということは、勅令四一号の石島は今の観音島だったと言えます。それでも韓国政府や学者たちは「石島は独島だ」と主張しています。一種の自家撞着だと考えます。

独島固有領土説によると、独島は久しい以前から于山島と呼ばれて来ましたが。その于山島が一八九九年と一九〇〇年の間に突然、石島と名前を変えた、と言うのです。私はこのような主張にどうにも納得できません。今まで説明して来たように、于山島は地図ごとにさ迷う島でした。一八八二年には「于山島を探せ」という王命まで下されました。しかし探せませんでした。ついに一九〇〇年、大韓帝国はその于山島を放棄しました。つまり大韓帝国は、一九〇〇年まで独島を知りませんでした。それなのに、その年新たに現われた石島を独島だと主張するのです。そうであるならば、なぜ于山島を捨てたのでしょうか。だから自家撞着と言うのです。

石島の実体

韓国政府と学者たちが、石島は今日の独島だ、と主張する論理は次の通りです。韓国の固有語――固有語の音を当てると石島の「石」は「トル」、「島」は「ソム」だから、固有語で石島

注43：固有語とは漢字語ではない固有の言葉。日本における「漢語に対する和語」のようなもの。日本で「山」を音(漢語)では「サン」、訓(和語)では「やま」と読むのを想起されたい。

少しも難しいことではありません。「いしじま」は慶尚道と全羅道でも、漢字で表記される際には間違いなく「石島」でした。漢字を知る有識者だったらそのくらい何のことはない文字生活を送っていました。あえて確実でもない方言を借りて「トルソム」を「ドクソム」に変え、さらに「ドク」に「独」という的外れな漢字を当てて表記する必要はありませんでした。

トルソム、すなわち石島が独島とは無関係であることを証明する一枚の地図を提示します。一九一一年、アメリカのロサンゼルス同胞たちが出版した李承晩の『独立精神』という本に載っている「朝鮮地図」です。全国の地名がハングルで表記されています。地図12-5は、その「朝鮮地図」と、鬱陵島の部分を拡大したものです。鬱陵島のすぐ南に「トルド（いしじま）」があるのが分かります。この「トルド」が石島です。ただ、鬱陵島の東北側になればならない島が南に描いてるのは間違いと言えます。とにかく、勅令四一号中の石島が東南八七キロの独島（日本で言う竹島）でないことは、この地図の発見によって大変明確になったと思います。私は、なぜ今まで数多い独島研究者がこの地図に注目しなかったのか不思議に思っています。

日本の独島編入

一八八三年から鬱陵島で暮らし始めた朝鮮人たちは、遠く東南の海上に漁労に出かけ、そこに独りポツンと存在する島を指して「独島」と呼び、そう書き残し始めたかと推測されます。独島を

鬱陵島の付属島嶼と考える住民の共同認識も、自然に生じたように見えます。しかし大韓帝国の中央政府が、独島を客観的に認知したり、官吏を送り探査したことはありませんでした。国土の四方の境界を明確にするには、全国を科学的に測量し、その成果を地図にして描く必要がありました。率直に言って大韓帝国の力量と水準を越える仕事でした。その結果一九〇〇年、鬱陵島郡域を画定するとき、独島は除外されてしまいました。

周知のとおり一九〇五年、日本は独島を自国の領土に編入しました。ある契機で独島の履歴を調査し、それが朝鮮王朝に所属していないことを確認してからのことでした。一年後の一九〇六年、その事実を偶然知った鬱陵郡守が、「本郡所属の独島が日本に編入されました」と報告しますが、中央政府はそれに対し何の反応も示しませんでした。すでに日本に外交権を奪われた保護国だったからだ、という弁明は困ります。第三国との外交の権利を奪われていたとしても、自らの国土と人民に対する支配権は残っている独自の国家でした。大韓帝国が日本に異議を唱えなかったのは、独島に対する認識がない中、日本の行為を大して重要なことだと思わなかったためです。

まさにこの部分が国家間領土紛争の「決定的時点（critical point）」だと思われます。日本が独島を自国の領土に編入する際、それを認知した大韓帝国は異議を唱えませんでした。そのため今日韓国政府が、独島問題を国際司法裁判所に提起しようという日本政府の主張を受け入れられない立場にあるのは、誰もが知っている事実です。率直に言って韓国政府が、独島は歴史的に韓国の固有の領土であると証明する、国際社会に提示できるだけの証拠は、一つも存在していないの

が実情です。(韓国の) 読者の皆さんには不快に聞こえるかもしれませんが、国際司法裁判所の公平無私な裁判官たちは、そのように判断するでしょう。私は一人の知識人として、その点を指摘しないわけにいきません。

韓国の独島編入

最後に、一九四八年大韓民国成立後の経過を簡略に紹介しておきます。一九五一年九月、日本と連合国の間で講和条約が結ばれます。その条約で日本の領土の境界が決定されました。当時韓国政府は、会議の主管者であるアメリカに、独島を日本の領土から分離してくれるよう要請しました。そうしながらも、そのことに関する適切な根拠を提示することができませんでした。韓国政府の要請を受けた米國務省は駐米韓国大使館に、独島がどこにあるのか問いました。大使館の職員は、独島の位置と履歴について正確に説明することができませんでした。一九五一年八月、米國務省は韓国政府に次にように返信しました。それは、背筋がゾクツとするほど正確な答えでした。

独島、別の名では竹島あるいはリーアングル岩 (Liancourt Rocks) と呼ばれることに関連し我々の情報によれば、通常人が居住していないこの岩の塊は、韓国の一部として扱われたことがなく、一九〇五年以来日本の島根県隠岐島の管轄下に置かれていた。韓国は以前に

けっしてこの島に対する権利を主張しなかった。

周知のように一九五二年一月、李承晩大統領は平和線(李承晩ライン)を発表し、独島を韓国の領土に編入しました。このようなアメリカの見解に反発したわけです。以後、韓日間で独島紛争が始まりました。アメリカは、韓国に通告した自らの見解があるにもかかわらず、二国間の紛争に介入しませんでした。両国との関係が大切であり、領土紛争というのは理性と法理の問題というより、感情と興奮の対象である場合が多いためです。

このややこしい問題に対し、李承晩政権以後の歴代政権は賢明に対処して来ましたが、独島は我々の領土であると主張し続けながら、相手方を刺激する攻撃的姿勢は自制して来ましたが、日本政府も同様でした。そのような姿勢で一九六五年、両国間の国交を正常化し、友好的関係を増進して来ましたが、金大中政権が韓日漁業協定を改定するに際し、独島を含んだ海を両国の共同漁労区域に設定したのも、そのような立場からです。一握りの民族主義者たちが漁業協定の改定を非難しましたが、金大中政権はそれに動じることなく賢明に対処しました。

ところが、二〇〇三年の盧武鉉政権から違って来ましたが、盧武鉉政権は独島に対し攻撃的姿勢を取りました。独島にいろいろな施設を設置し、住民を送り込み、民間に観光を推奨しました。すると日本政府が抗議し、それがまた韓国政府と国民の強硬な対応を呼ぶという悪循環が増幅されました。以後、韓国社会が独島をどのように捉えて来たのかを紹介します。

我が祖先の胆嚢

二〇〇五年のことです。韓国詩人協会の詩人たちが独島まで行って、詩の朗誦会を催したことがあります。そのとき発表された高銀の詩を紹介します。まず、一九八七年に発表された彼の「白頭山」という長編の叙事詩から紹介します。前述したように、「白頭山」で高銀は国土を、白頭山を頭とする身体として謳いました。しかしそのときは、独島について言及しませんでした。国土の東の端を謳うに際し、鬱陵島の聖人峰に軽く言及しただけです。つまり一九八七年までは、高銀の国土感覚に独島はそれほど重要ではなかったのです。ところが、紛争が本格化した二〇〇五年の詩の朗誦会で高銀は、独島について次のように謳いました。

我が祖先の胆嚢^{たんのう}独島

あんたの年季の入った胆汁で

私はあらゆる波濤の生を耐えた

独島が我々の身体なくてはならない部分として創出されたのです。当時朗誦されたいくつかの詩は、後に『私の愛 独島』という詩集として出版されました。副題がさらに刺激的です。「独島の岩を砕けば韓国人の血が流れる」です。独島が反日種族主義の象徴として登場するよう

になるにつれ、国土を貫流する韓国人の血脈が独島の岩にまで根を張るようになったわけです。日帝が全国の血脈を切ったと言って、一九九五年、金泳三政権が全国の山地に打ち込まれた鉄杭を引き抜くというでたらめな騒動を起こした一つの呪術的精神世界が、一〇年後、似たような契機と象徴により正確に再生したのです。そのようにして独島は韓国人を支配する反日種族主義の熾烈な象徴の最たるものとして、最も神聖なトーテムに浮上しました。

このような低劣な精神世界に留まっていたのでは、独島問題の解決は不可能だと考えます。金大中政権まで続いた歴代政権の冷静な姿勢に戻って行く必要があります。一九五一年、米國務省が明らかにしたように、独島は一つの大きな岩の塊に過ぎません。土地があり、水があり、人が暮らす島ではありません。国際社会が領海を分ける指標として認定する島ではありません。それを民族の血脈が湧き出るものとして神聖視する種族主義の煽動は、止めなければなりません。冷徹に于山島と石島の実体について考えてみなければなりません。挑発的な施設は撤収し、観光への誘いは中止しなければなりません。そうしてから、長く沈黙する必要があります。その間は、日本との紛争は低い水準で一種の儀礼として管理されなければなりません。最終的解決は、遠い未来の世代に先送りしなければなりません。そうすることができれば、そうした判断力と自制力を持った国として、韓国は先進社会へと進歩して行けるでしょう。独島を凝視すると、生身の韓国が見えて来ます。独島に関する省察は、我々にそのような歴史的課題を提示しています。

参考文献

- 許英蘭「独島領有権問題の性格と主要争点」(『韓国史論』34卷〔2002年刊〕所収)
 [許英蘭(2002), 『독도 영유권 문제의 성격과 주요 쟁점』, 『한국사론』34.]
- 李相泰「(史料が証明する)独島は韓国の地」経世園、2007年刊
 [이상태(2007), 『(사료가 증명한다) 독도는 한국의 땅』, 경세원.]
- 朴進熙「韓日会談―第1共和国の対日政策と韓日会談展開過程―」鮮仁、2008年刊
 [박진희(2008), 『한일회담―제1공화국의 대일정책과 한일회담 전개과정―』, 선인.]
- *池内敏「竹島問題とは何か」名古屋大学出版会、2012年刊
 孫承喆「独島その歴史的真実」景仁文化社、2017年刊
 [손승철(2017), 『독도, 그 역사적 진실』, 景仁文化社.]

13

鉄杭神話の真実

金容三

鉄杭騒動の出發

「植民地期に日帝は朝鮮の地から人材が出るのを防ぐため、全国の名山にわざと鉄杭を打ち風水侵略をした」。今まで我々社会では、このような話が伝説のように口伝えされて来ました。果たしてそうだったのでしょいか。それは事実ではありません。みな嘘です。

日帝が打ち込んだという鉄杭がみなニセモノだったという事実は、私が『月刊朝鮮』一九九五年一〇月号に書いた「大韓民国の国教は風水凶讖か？」という記事で明らかにしました。この記事が出たあと、独立記念館^{注44}が展示していた鉄杭は片付けられ、日本では産経新聞の黒田勝弘記者が、その経緯を取材して社会面トップ記事で報じました。

我々の社会に鉄杭騒動を引き起こす契機となったのは、金泳三政権が一九九五年二月に「光復五〇周年記念力点推進事業」として推進した鉄杭除去事業です。それ以前は主に民間の次元で、

注44：忠清南道天安にある歴史博物館。1982年の教科書問題により国民的な建設運動が起こり、87年8月15日に開館した。主として19世紀後半以後の日本による侵略と、それに対抗した朝鮮人の独立運動に関する展示を行なっている。

本書は韓国で出版された『反日種族主義』（2019年、ソウル・未来社刊）をもとに、編著者が日本語版を作成したものです。

はん にち しゅぞく しゅぎ につかん き き こんげん
反日種族主義 **日韓危機の根源**

2019年11月15日 第1刷発行
2019年11月30日 第3刷発行

編著者 イ ヨン フン
李栄薫

発行者 新谷学

発行所 株式会社文藝春秋



〒102-8008
東京都千代田区紀尾井町3-23
電話 03-3265-1211

印刷・製本 株式会社 光邦

定価はカバーに表示してあります。
万一、落丁乱丁の場合は送料当社負担でお取り替え致します。小社製作部宛、お送り下さい。
本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、私的使用以外のいかなる電子的複製行為も一切認められておりません。

©RheeSyngman Academy 2019 Printed in Japan
ISBN978-4-16-391158-8

装丁…石崎健太郎
本文デザイン…DTP…土屋文乃
図表作成…エヴリ・シンク
編集協力…久保田るり子、西岡力
編集補助…嶋津弘章、小石淑夫